

# 「創造性を豊かにする」保育を考える

## 1 乳幼児期に育みたい資質・能力と領域「表現」

幼稚園教育において育みたい資質・能力とは、第1章「総則」、第2 幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に新たに示された資質・能力の三つの柱、すなわち、(1)豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かったり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」、(2)気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」、(3)心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」<sup>1)</sup>です。これは保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領においても同様に、第1章「総則」に明示されています。そして、これらの資質・能力は、各領域の「ねらい」及び「内容」に基づく活動全体によって育むことが示されています。さらに、こうした「ねらい」及び「内容」に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼稚園等修了時の具体的な姿を示したものが「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」です。これは、保育者が指導を行う際に考慮するものであり、到達すべき目標ではないことや、個別に取り出されて指導されるものではないこと、また「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、5歳児に突然見られるようになるものではないため、幼児が発達していく方向を意識して、それぞれの時期にふさわしい指導を積み重ねていくことに留意する必要があります。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」には、「健康な心と体」、「自立心」、「協同性」、「道徳性・規範意識の芽生え」、「社会生活との関わり」、「思考力の芽生え」、「自然との関わり・生命尊重」、「数量や図形、文字等への関心・感覚」、「言葉による伝え合い」、「豊かな感性と表現」の10の姿が示されています。このうち、領域「表現」と最も関わりが深いと考えられるのは「豊かな感性と表現」でしょう。この「豊かな感性と表現」を資質・能力の三つの柱からみると、「知識及び技能の基礎」は、「豊かな感性と表現」の「心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き」にあたり、「思考力、判断力、表現力の基礎」は、「感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだり」にあたり、「学びに向かう力、人間性等」は、「表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる」にあたりと考えられます。

音楽表現を一例に挙げてみます。1989年に5領域へと改訂される以前の領域「音楽リズム」では、例えば「役割を分担したり、交替したりなどして、楽器をひく」や、「知っている旋律に自由にことばをつけて歌う」<sup>2)</sup>など、子どもの具体的な表現の姿が挙げられていましたが、領域「表現」の「内容」

では音楽表現のこうした具体的な姿は挙げられていません。例えば(6)「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう」<sup>3)</sup>と示すにとどまっています。それは「内容の取扱い」(3)に「表現する過程を大切に<sup>4)</sup>して自己表現を楽しめるように工夫すること」とあるように、子どもたちが生活のなかで、様々な経験を積み重ね、感じたことや考えたことを様々に表現しようとする、その表現する「過程」が大切だからです。そのため、「内容」(4)「感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする」<sup>5)</sup>のように、子どもたちが生活のなかで経験するモノ・コトを、音楽表現だけでなく身体表現や、造形表現も含んだ多様で総合的な表現を育むことが大切になるわけです。

## 2 表出と表現

津守真の言葉に「行為を表現としてみる」があります。もう少し詳しく引用すると、「子どもとの応答の中で、自分の全感覚をはたらかせて、子どもの行為を知覚し、子どもの世界に出会う。そこで知覚された行為は子どもの世界の表現である」<sup>6)</sup>と述べられています。日々の保育の中で、子どもに<sup>7)</sup>応答しながら、保育者の諸感覚を通して知覚した子どもの行為すべてが表現であると考えられるわけです。では保育者によって知覚されなかった「行為」は、「表現」ではないのでしょうか。

大場牧夫は、「表現」を広い意味で「あrawし」という言葉であrawしています。この「あrawし」において、あrawし手と受け手という関係が成立しているものを「表現」と考えています。大場は「伝えたいという意図が働いているものを『表現』」<sup>7)</sup>と言い、「伝えたいという意識をしないで、自分から何か出してしまうという形を『表出』」<sup>7)</sup>であると述べています。

さらに、大場は「表出」には、「ネガティブな表出」と「ポジティブな表出」があると述べています。そして、本人が自覚しなくても「あrawれる」という状態の場合もあれば、「あrawす」という状態の場合もあることに言及しています。つまり、表出には「あrawす」と「あrawれる」があり、子どもの中にはこの「あrawす」と「あrawれる」が表裏一体となっていることが分かります。あrawし手である子どものこうした表出が、受け手との相互作用によって「表現」となるのであり、あrawし手の意図に関わらず、受け手となる他者の存在が、子どもの「あrawし」を「表現」たらしめているのです。冒頭の津守の言葉に戻ると、いかに子どもの行為を見逃さずに知覚し、それを受けとめることが大切であるか、理解できるのではないのでしょうか。

一方で、幼稚園教育要領等における「表現」1ねらい(2)にあるように「感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ」(下線筆者)<sup>8)</sup>ためには、日々の生活の中で、子ども自身の意図や思いをもった行為を「表現」として捉えていく視点が重要です。こうした表現の積み重ねが、子どもの創造性を豊かにしていくからです。

### 3 応答性と創造性

#### ① 応答すること

保育実践者で研究者でもあった津守は、保育において子どもの行為に応答することの重要性に触れ、保育者と子どもが応答を絶えず繰り返す過程を丁寧に歩んでいると、「次第に自らの世界をより明瞭な形にして表現するに至る」<sup>9)</sup>と述べています。保育者の応答性が、子どもの表現を引き出していくことが分かります。また、宮原英種・宮原和子による、子どもの行動に対する保育者からの言語的応答や、モノによる環境からの応答性を重視した「応答的保育」に関する研究から、保育者という人的、あるいはモノという物的環境からの応答的な反応によって、子どもは環境と相互作用しながら自分なりの表現を広げていくことが分かります。

さらに、子どものあそびにも「応答性」はみられます。幼児教育学者であった小川博久は「〈いないいないばあ〉や〈花いちもんめ〉のように応答する行為を通した集団遊びや〈かごめかごめ〉、〈あぶくたった〉のように循環する集団遊びには、応答するリズムと循環するリズムを集団で作りに上げていくからだの動きがある」<sup>10)</sup>と述べており、保育者の応答性だけでなく、子ども同士の応答性もまた子どもの表現を活性化させることにつながっていきます。

フィリピンの「サギディ」という身体表現をともなった唱え歌をもとにした表現活動を例に挙げてみます。「サギディ」は、伝言ゲームのようなあそび方となっており、「サギディ・サギディ・サッポップ」という唱え歌の間に、保育者が身体表現し、それを子どもたちが模倣していきます。つまり、保育者が身体表現によって問いかけ、子どもたちが身体表現で答える、応答的なあそびになっています。子どもたちにとって、「サギディ・サギディ・サッポップ」は、全く意味をもたない言葉であり、そのリズムカルな音の面白さを楽しみ、率先して保育者の「問いかけ」役をやりたがる子どもたちが出てきました。子ども同士による応答です。そして、このあそびは、子どもの日常的なあそびの中に取り込まれ、「サギディごっこ」となったことを、のちに保育者から聞くことができました。

#### ② 即興的思考と日常的創造性

創造性研究者であるキース・ソーヤーは、創造性は、集団による即興的なコラボレーションのなかで生じることに言及しています。なかでも、「即興的な会話」に着目し、日常における多くの会話が即興的で、協同的であることから、音楽においても「即興に参加する人々はそれぞれの人々が何をするか予測できないので、互によく聞き合い、そしてその表現に答える必要があり、結果として協同的なパフォーマンスを生み出している」<sup>11)</sup>と述べています。音楽心理学者のデイヴ

ィッド・ハーグリーブスは、こうしたソーヤーの「即興的な会話」のような応答性を、「即興的思考と日常的創造性」<sup>12)</sup>として表しています。即興的思考は、日常生活における人々の相互行為や会話の中心に位置付き、これが日常的な創造性の源となっていると考えられます。つまり、子どもが保育者や子ども同士と日常的に交わしている会話やあそびの過程には、即興的思考が多分に含まれており、子どもは日常的に創造性を豊かにしているといえます。

子どものごっこあそびを例に考えてみます。3歳児クラスの子どもたちが、保育者と砂場でレストランごっこをしています。子どもは、保育者に食べてもらいたいと、プラカップやトレイに砂を盛り付け、次々と運びます。一人の子どもは、保育者がプラカップの砂を上からスプーンで押している様子を見て、自分もそれを真似てプラカップの砂をスプーンで押さえてみますが、ただスプーンで押さえるだけでなく、そこに葉や花を飾り付けようとしています。それを見た別の子どもは、プラカップに花びらを入れ、水を加えてジュースを作った、といって持ってきます。さらに保育者を真似てプラカップの砂をスプーンで押さえた子どもは、今度は友達と一緒に、プラカップではなく砂場用のバケツにたくさん砂を詰め、上からスコップで押してしっかり固めようとしています……といった具合に、子どもたちは保育者の行為を真似つつ、さらにそこに新しいアイデアを付加したり、そのアイデアにヒントを得て、その場を共有する仲間と一緒に、新しい創作物をつくりだしたりしており、それは常に即興的思考の連続であり、それが協同的に展開されているわけです。そして、子ども一人ひとりの即興的思考が、その場を共有する子ども集団のなかで相互に作用し合って、日常的に創造性を豊かにしていくのです。

## 4 表現を評価する

こうした子どもの表現を保育者はどのように受けとめていけばよいのか、また、子どもの表現をどのように評価すればよいのか、日々の保育において迷ったり、考えたりすることもあるかと思えます。子どもにとっての表現は、すでに述べた通り、子ども自身の意図や思いをもった行為そのものであり、それは「できる」か「できない」かを評価するのではなく、子ども自身が集団の中で、どのように育っているのか、というプロセスを評価することが重要です。では、そのプロセスを評価するために、日々の保育ですべきことは何か、それが「記録(ドキュメンテーション)」と「省察(リフレクション)」です。記録は、こうした子どもの発達に対する理解だけでなく、保育者自身の振り返りを促し、指導改善を図ることにつながります。記録にも文字記録、映像記録、写真記録、音声記録等様々ありますが、いずれにおいても、記録することによって、新たに見えてくるものがあります。

# CONTENTS

まえがき	001
はじめに 知っておきたい「創造性を豊かにする」保育に関する基礎・基本	002
1 幼児教育の基本	002
2 幼児教育において育みたい資質・能力	003
3 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	004
「創造性を豊かにする」保育を考える	007
1 乳幼児期に育みたい資質・能力と領域「表現」	007
2 表出と表現	008
3 応答性と創造性	009
4 表現を評価する	010
5 情報機器を活用した表現と創造性	012

## 第1章

## よくあるギモン 30

Q 1 子ども同士の刺激は大切？ 1歳ごろ～	018
Q 2 メディアに依存した表現あそびはよくないの？ 2歳ごろ～	020
Q 3 ごっこあそびはどのように工夫すればいいの？ 2歳ごろ～	022
Q 4 ピアノが苦手な私にもリトミックはできる？ 2歳ごろ～	024
Q 5 ブロックや積み木などを友達と共有するのが難しい時は？ 3歳ごろ	026
Q 6 友達の表現を真似てばかり……。それって悪いこと？ 3歳ごろ	028
Q 7 戦いごっこをしても大丈夫？ 3歳ごろ	030
Q 8 「元気よく歌いましょう」はNG？ 3歳ごろ～	032
Q 9 お絵描きはたくさん色を使った方がいいの？ 3歳ごろ～	034

Q10	身体表現あそびはどうやって広げたらいいの？ 3歳ごろ～	036
Q11	子どもと歌を歌う時に配慮することは？ 3歳ごろ～	038
Q12	造形活動の時、見本は必要？ 3歳ごろ～	040
Q13	型のない、子どもの自由な身体表現の指導が難しい……。どうしたらいいの？ 3歳ごろ～	042
Q14	手や足が汚れることを極端に嫌がる子への対応は？ 3歳ごろ～	044
Q15	みんなと一緒に活動に参加しない子どもへの対応は？ 3歳ごろ～	046
Q16	あそびをなかなかやめられない時は？ 4歳ごろ	048
Q17	絵に苦手意識のある子どもへの対応は？ 4歳ごろ	050
Q18	楽器あそびはどうやって取り入れたらいいの？ 4歳ごろ～	052
Q19	子どもの表現を広げる言葉かけとは？ 4歳ごろ～	054
Q20	子どもに「つくって」「描いて」と言われたら？ 4歳ごろ～	056
Q21	楽器あそびから合奏は難しい？ 4歳ごろ～	058
Q22	いつも同じ絵ばかり描いているけれど……。どう対応したらいいの？ 5歳ごろ	060
Q23	音が合わない・拍が合わない時の対応は？ 5歳ごろ	062
Q24	劇あそびって難しい……。どうしたらいいの？ 5歳ごろ	064
Q25	子どもの表現が広がる環境構成のコツは？ 5歳ごろ	066
Q26	子どもの表現を認める言葉かけは？ 全年齢	068
Q27	大きなものをつくる場所がない時は？ 全年齢	070
Q28	製作あそびの片付けはどのようにしたらいいの？ 全年齢	072
Q29	先生はピアノが弾けなきゃダメ？ 全年齢	074
Q30	表現を評価するって難しい……。どうしたらいいの？ 全年齢	076
《column》 子どもの表現から①		078

## 第2章

# 「創造性を豊かにする」表現あそび②

- |  |  |
|--|--|
| 1 布で光や風を感じる 0～2歳ごろ ..... 080               | 12 からだの音であそぼう 4歳ごろ～ ..... 102              |
| 2 触って感じる粘土あそび 0～3歳 ..... 082               | 13 ぐるぐるタワーをつくってみよう 4歳ごろ～ ..... 104         |
| 3 わらべうたであそぼう 1歳ごろ～ ..... 084               | 14 絵本をもとにした表現あそび 4歳ごろ～ ..... 106           |
| 4 雨であそぼう、水であそぼう 1～4歳ごろ ..... 086           | 15 100色の色水あそび 5歳ごろ ..... 108               |
| 5 ビー玉転がし・転がるあそびの<br>ヒントいろいろ 2歳～ ..... 088  | 16 光と影のあそび 5歳ごろ ..... 110                  |
| 6 シャボン玉あそびから傘アートへ 3歳ごろ～ ..... 090          | 17 白の世界 —ブラックライトを当ててみよう—<br>5歳ごろ ..... 112 |
| 7 手形・足形であそぼう 3歳～ ..... 092                 | 18 聴いて・動いて・つくってみよう<br>5歳ごろ ..... 114       |
| 8 望遠鏡をつくってのぞいてみよう 3歳～ ..... 094            | 19 あそびを通した劇づくり 5歳ごろ ..... 116              |
| 9 園内探検隊になろう マップづくり 3歳～ ..... 096           | 20 コマ撮り動画をつくってみよう 5歳ごろ ..... 118           |
| 10 お店屋さんごっこ・おまつりごっこを<br>楽しもう 3歳～ ..... 098 | {column} 子どもの表現から② ..... 120               |
| 11 ちょっと変わったまねっこあそび 3歳～ ..... 100           |  |

## 第3章

# 接続期で「創造性を豊かにする」

- |                                       |
|---------------------------------------|
| 1 幼児教育と小学校教育の接続の必要性と基本的な考え方 ..... 122 |
| 2 創造性とは ..... 124                     |
| 3 接続期の子どもの表現を支えるために ..... 126         |
| 4 幼児期から児童期の創造性に関するあそび、学び ..... 128    |

## 子どもと歌を歌う時に配慮することは？

子どもに新しい歌を教える時、いつもなかなか覚えてもらえず、困っています。どうしたら、子どもがすぐに歌詞を覚えて歌えるようになるでしょうか。

【3歳ごろ～】

保育者

昨日歌った歌、  
今日は歌えるようになるかな。



### なぜだろう？

保育者のギモン

アニメソングやメディアから流れてくる歌は、すぐ覚えて歌えるのに、園で歌う歌は、なかなか覚えられないことがあります。どうしてでしょうか。

### お答えします！

解決の糸口

まず、特徴的なフレーズから歌ってみましょう。特徴的なフレーズは覚えやすいので、子どもも楽しく歌えます。次に、そのフレーズの前後を付け足して歌ってみましょう。だんだん歌えるフレーズが長くなっていくはずですよ。

保育者

今日は「森のくまさん」を歌ってみましょう。



初めからピアノで伴奏して歌うのではなく、伴奏なしでワンフレーズごとに歌ってみましょう。メロディだけ弾いて歌ってみるのもよいかもしれません。また、歌詞を楽しんで覚えることができるような工夫があると、早く覚えることができます。慣れてきたら、少しずつ伴奏を入れてみましょう。難しい部分や歌詞が混乱しそうな部分は、「今のところ、先生もう一回聴きたいな」等と声かけしながら、何度も繰り返し歌うと安定していきます。

ANSWER

### みんなで歌うと楽しい！ 気持ちいい！

特徴的なフレーズから歌ってみるだけでなく、難しい部分は区切って繰り返し歌ってみたり、歌詞が混乱しそうな部分はペープサートや紙芝居といった視覚的要素を取り入れたりしてみましょう。正しい歌詞や音程を覚えることにとらわれ過ぎず、みんなと一緒に歌うことが楽しい、一緒に歌うと気持ちいい、と思えるような指導を心がけましょう。

### 子どもの声域や興味に合った選曲を

子どもの声域は、もちろん年齢や個人差もありますが、およそ1オクターブ前後を想定しておくといよいでしょう。低年齢ほど音域は狭いので、年齢に合わせて音域を広げた選曲をするとよいと思います。同じフレーズを繰り返す歌や、歌詞が追いつけっこする歌、身体を動かしながら歌う曲なども、歌詞を覚えやすいポイントになります。

POINT



# 手や足が汚れることを 極端に嫌がる子への対応は？

【3歳ごろ～】

手や足が汚れることを嫌がる子どもがいます。土あそび泥あそびはもちろん砂場に入ることもありません。粘土あそびや絵の具で手型をとったり、ボディ(ハンド)ペインティングも嫌がり、糊やボンドに直接ふれたりすることもできません。

保育者

手や指に絵の具をつけて、お絵描きしてみましょう。



子ども

汚れるからイヤ。

## なぜだろう？

保育者のギモン

いろいろなモノの感触を楽しんでほしいのに、「汚れるから」といって触りません。他の子どもたちは楽しそうにしているのに、どうして？

## お答えします！

解決の糸口

特定のモノを触ることに強い抵抗を感じている場合があります。みんなと同じ活動を同じように経験しなくても、それを補う活動を考えましょう。その子が納得して楽しめる方法を相談しながら一緒に探します。

保育者

触るとどんな感じがする？  
どんな音？ どんな色？



子ども

ペタペタする！ わさわさ、ぼこぼこ！  
茶色、灰色！

直接素材にふれなくても感触を味わったり、あそびを楽しんだりすることができるよう、活動を広げて考えてみましょう。触覚だけではなく、聴覚や視覚など他の感覚で楽しめるよう、モノの音や匂いなどが感じられる活動や言葉かけも考えてみましょう。

繰り返し「みんなと一緒にやってみよう」「頑張っ触ってみよう」と誘うことや、「触ったみんなは気持ちいいよね!」と、その子が孤立するような言葉かけをすることは避けましょう。

ING

### 諸感覚に働きかけるあそびへと 広げてみる

感触あそびは素材に直接触ることが前提ですが、活動のねらいを少し広げて諸感覚に働きかける活動として考えてみましょう。モノの匂い、音、色や形を感じるあそびを考えてみましょう。「どうしたらできるようになるか？」から「活動をどのように広げたら経験することができるか？」という視点で考えることが大切です。

POINT

### 土や粘土、絵の具やスライムなどを ビニール袋に入れて触ってみる

直接触ることが苦手でもビニール袋やラップの上から、粘土や絵の具、スライムなどを触ってみることから始めてもよいかもしれません。画用紙の上にチューブから直接出したカラフルな絵の具の上にラップを置いて、その上から指で押すと思いがけない混色や色の広がりを見ることができます。

# 1 布で光や風を感じる

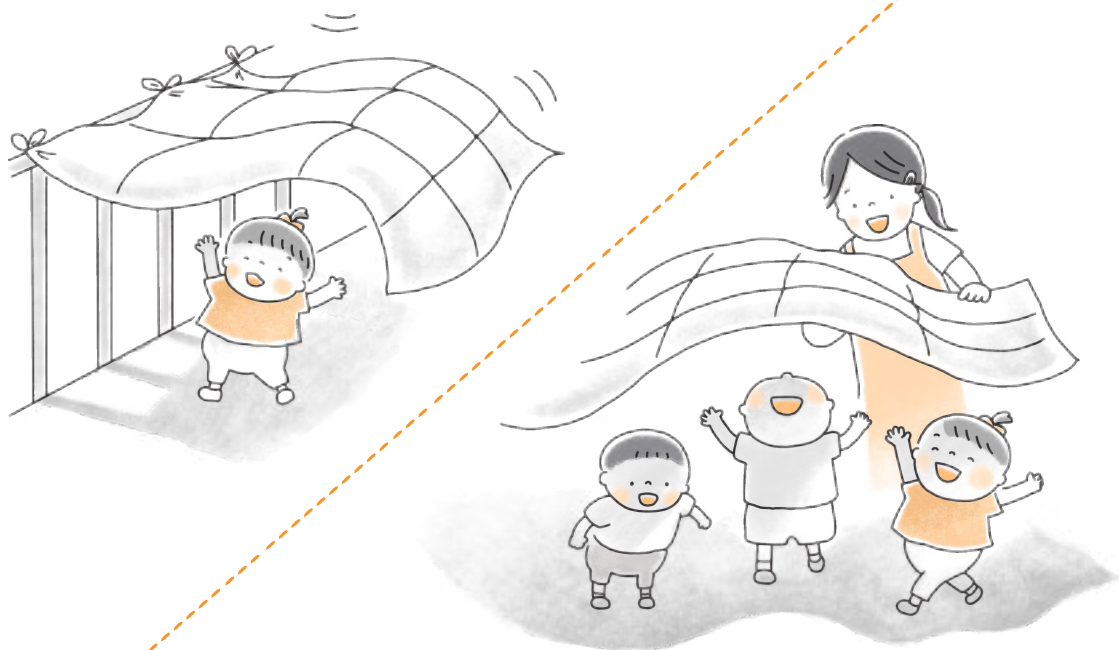
想定年齢 0～2歳ごろ 実施人数 1～6人程度 所要時間 約15分

お天気がよく、心地よい風の吹いている日を選んであそびましょう。布があるだけで目には見えない風が目の前に広がり、布の向こうからは太陽の光を感じられるでしょう。子どもが慣れるまでは、保育者のそばで一緒に楽しめます。

準備するもの 光が透けて見える布(化繊の風呂敷9～12枚程度を縫い合わせたものや薄めのカーテン等)

あそびかた

1 天気のよい風の強い日、屋上や園庭に大きな布を持ち出してあそびます。布の1辺を子どもの背丈よりやや高い位置の手すり等とつなげます。風を受けた布が大きく広がり、薄い布の向こうからは太陽の光が注いできます。



大きく膨らんだり、ひらひらとたなびいたり形を変える布に子どもたちは大喜びです。興奮した子どもが友達とぶつかってけがをしないように、あそびながら目を配りましょう。

2

こんなあそびかたも…

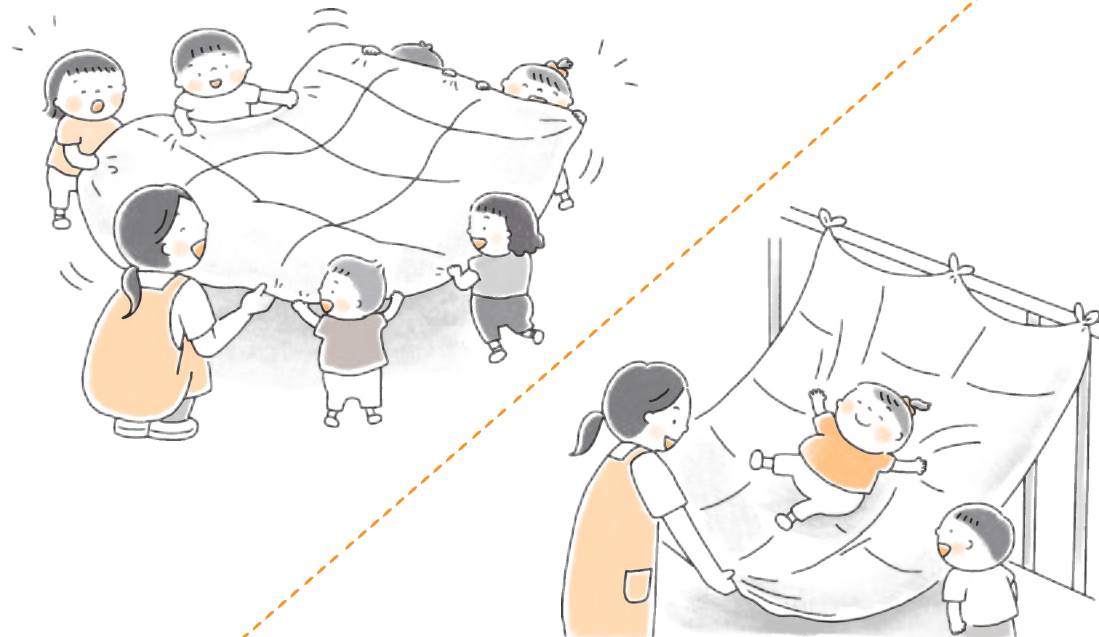
- カーテンなど透け感のある布を広げるのではなく上から吊ると、布越しに友達の存在を感じたり、影が映り影絵あそびをしたりなど、これまでとは異なった視点の光や風を感じるあそびを展開できます。

困っている子どもには…

- 低年齢の子どもや他の子どもの活発な動きにびっくりしている子どもとは、小さな布であそびましょう。保育者が優しく動かすと子どもも怖がらずに楽しめます。布が上がった時に保育者の笑顔が見える位置であそび、「風が来たよ」等、声をかけながら布を動かすと安心します。

3

布をほどこき、保育者と子どもと一緒に布の端を持って上下に動かすと風が生まれます。また、布の端を持って離れたたり、近付いたりすると布が風を含み、布の形の変化を楽しむことができます。



布の上に乗れ、揺られてみると、陽の光の温かさを感じながら風になったような感覚を味わえます。子どもが興奮していると動きが大きくなり、けがにつながることも。リラックスした雰囲気を楽しめるような配慮が必要です。

4

# 12 からだの音であそぼう

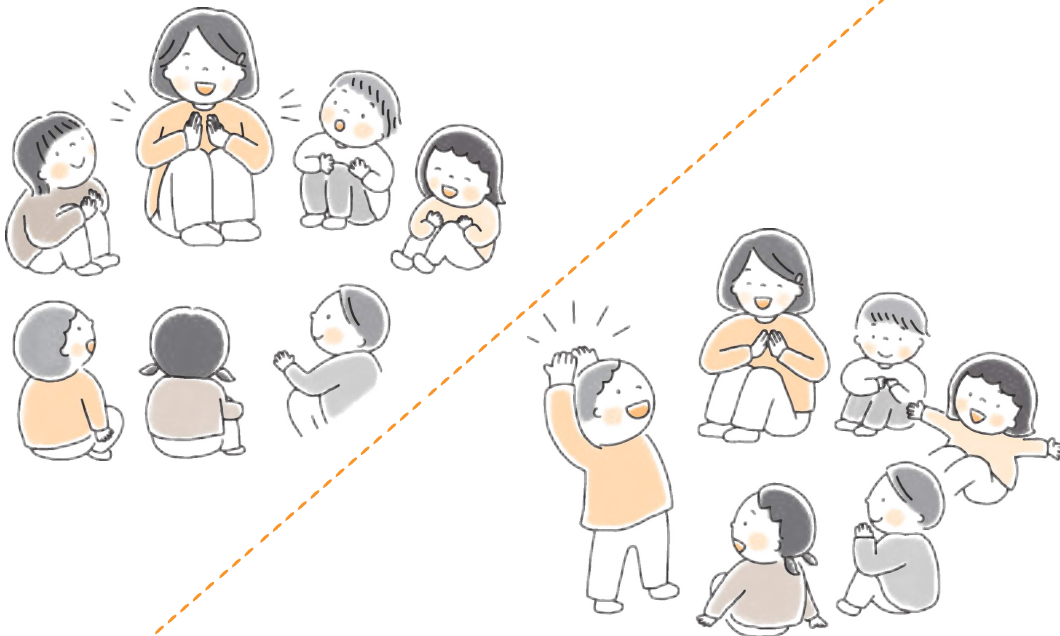
想定年齢 4歳ごろ～ 実施人数 5人～ 所要時間 約15分

手をたたいたり足踏みしたり、からだを楽器にしてあそびます。最初は手拍子ひとつを順番に鳴らしてみるだけ。どんな手拍子の音が生まれるでしょうか。一人ひとりの子どもの表現が認められる場であり、誰もが主役であることを意識します。

準備するもの 特になし

あそびかた

1 保育者も子どもと一緒に輪になって座り、一人ずつ順番に手拍子を鳴らします。手拍子が速くなったり、遅くなったりするかもしれません。表現を聞き取って、次のルールへと発展させていきます。



「速く手拍子をまわす」「大きい音」「小さい音」のようにルールを決めて、手拍子を回していきます。子どもたちの工夫に耳を傾け、一人ひとりの表現をアイコンタクトや頷きで受けとめていきましょう。

2

こんなあそびかたも…

● 最初の手拍子回しでは、子どもたちのちょっとした表現を取り上げて、それを次の手拍子回しのルールにしていくと、あそびは無限に広がります。例えば、手拍子1つ、と言っていたのに、2つたたいてしまった子どもがいたら、今度はふたつずつ音を回してみよう、といった具合に。

困っている子どもには…

● その場ですぐに参加しない子どもに対して、無理に参加させずに、「やりたくなったら、参加してね」と声かけをしておき、保育者はその子にいつもと違う動きが見えたら、それを真似してみたり、他の子どもたちと共有したりして、その子どもが参加しやすい場になるよう心がけます。

3 手拍子だけでなく、膝うちや足ぶみの音、声など、からだの様々な音を使ってみましょう。「手拍子・膝うち・膝うち」を全員でたたいたら、次に自分の名前を入れてみましょう。それをまた全員で真似します。



からだの様々な音を使って、保育者が4拍子のリズムをつくり、それを子どもたちがまねする、まねっこリズムであそびます。何度か繰り返して、「先生の代わり、やってくれる人？」と声をかけ役割交代してみましょう。

4

【参考文献】T. ウィンチャート／坪能由紀子・若尾裕共訳（2012）『音あそびするものよっといで』音楽之友社